

Six Foot Track Marathon

走る「ミチ」はひとつじゃない オージーたちの トレイルレース

849人が5〜15分おきにウエーブスタート

シックスフットトラックマラソン (45km)

開催日/3月14日(土)

場所/オーストラリア・ブルーマウンテン

世界遺産にも登録されている

ブルーマウンテンを走る

オーストラリア最大のトレイルレースに

編集部・栗原が挑戦

他の日本人参加者なし、装備はデジカメだけ
こんなので本当に走っちゃうの？

ブルーマウンテンを走る トレイルレースに挑戦

「フルマラソンとトレイルラン、どっちが好きなんだい？」

シドニーから車でハイウェイを通り、100kmほど離れたカトゥーンバという町へ向かう途中。隣でハンドルを握っていたゼッドさんがそう尋ねてきた。ゼッドさんは、オーストラリア最大のトレイルレース「シックスフットトラックマラソン」の事務局から連絡を受け、日本から大会の取材にやってきた僕を、シドニーまで迎えに来てくれた。世界遺産のブルーマウンテンが舞台のこのレースには、ゼッドさん自身3度目の出場であり、フルマラソンでも3時間半を切るタイムを持つ。

「フルマラソンはフルマラソン、トレイルランはトレイルランで、良いところは違うと思う」

僕の回答に、ゼッドさんは、ウンウンとうなずきながら「イエス」と答えてくれた。一方で自分自身では、本当にその違いがわかっているのかどうか、いまいち自信が持てなかった。

バックパック無し 「丸腰」でレースへ

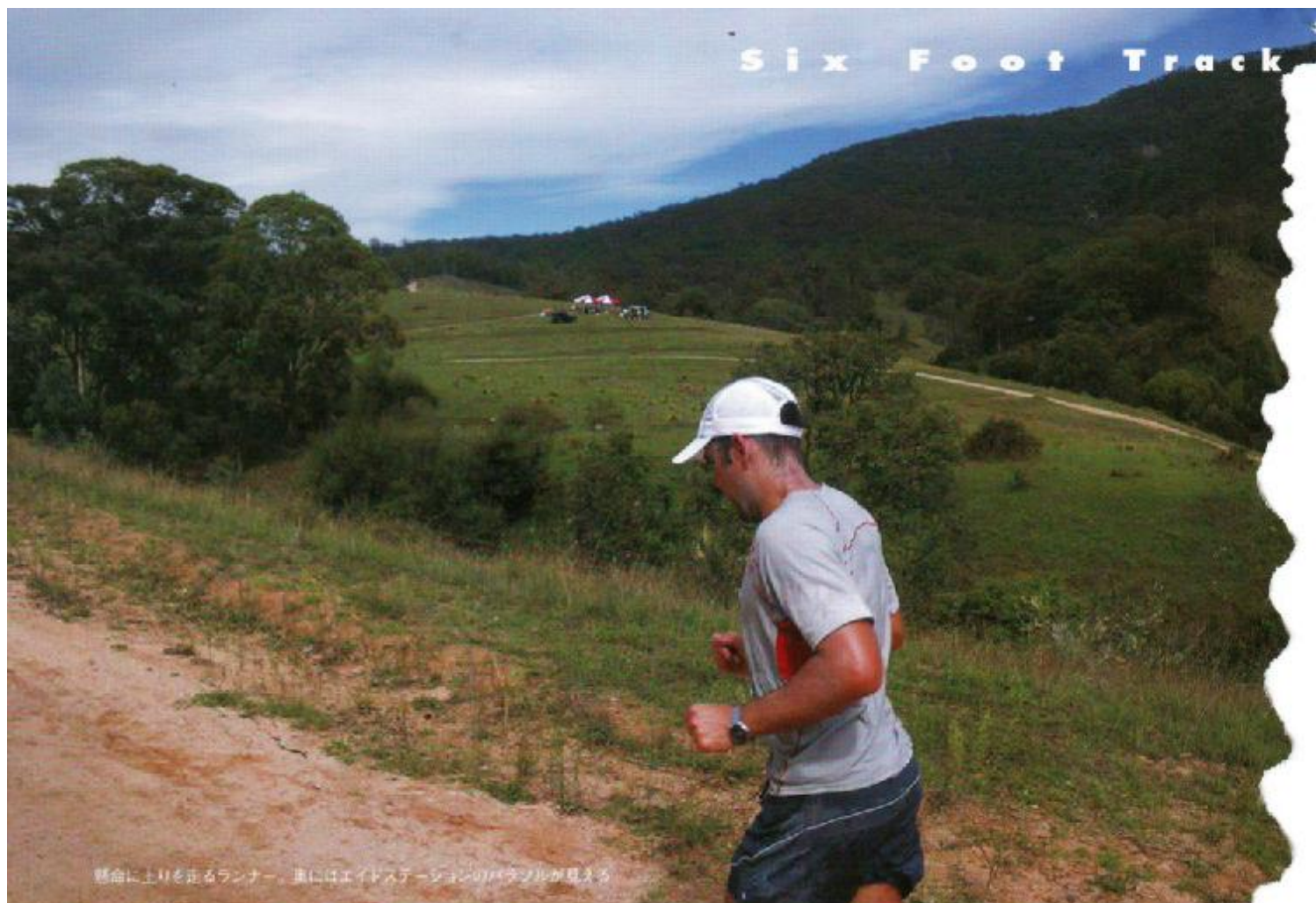
ゼッドさんに大会受付を行っているカトゥーンバのホテルまで送ってもらい、ゼッケンとチップを受け取る。受付会場は、以前取材で訪れた、NYCマラソンや、ホノルルマラソンよりもずっと小さ



Marathon

倒木の橋を渡るドラネイコース

川を泳ぐ(?)ウエットコース



懸命に上りを走るランナー。奥にはエイドステーションのバナーが見える

いが、外観や内装からは、重ねてきた年月の長さや、格式の高さが感じられる。レースコースとなる「シックスフットトラック」も、カトウインバと世界最古の鍾乳洞「ジェノラン・ケーブ」を結ぶ道として、1884年に開かれた、100年以上の歴史を誇るトレッキングコース。レース自体も26年目、日本でハセツネが始まる前から行われている。

レース当日は朝の5時半に部屋を出た。シャトルバス乗り場に指定されている近くの公園につくと、手荷物預かり所の女性スタッフが声をかけてきた。「バッグを置いて行けば？ エイドステーションはいつでもあるわよ」

何しろ海外の、しかも山の中で行われるレースである。不安の無いよう万全を期しなかった。しかしノーと言えない日本人は、バックパックごと女性に渡してしまう。そしてバスに乗ってから、バスポートもその中に入れたことに気づく。持っているのは取材用のデジカメだけ。不安の中、スタートラインに立った。

「ウエット」と「ドライ」 川渡りはコースを選択

レースは1000〜3000人ずつ4組に分かれてのウエーブスタート。最初の2kmはシダの生い茂る細道が続く。多少渋滞はしたものの、そこを抜けるとトレイルの幅も広くなり、問題なく走れるようになった。林道を駆け、草を食む馬を横に見ながら、高原へと抜ける。聞こえて

くるのは、ベルを鳴らしているような鳥のさえずりと、風のささやき、そしてランナーたちの足音と息遣いだけ。現代社会を感じさせる一切のものが、そこからは隔離されている。

人工的なものと言えば、簡素なテーブルに、水とスポーツドリンク、バナナやスイカ、グミ状のお菓子などが置かれたエイドステーションくらい。しかしその数がすごい。2〜4kmごと、トータルでコース上に15カ所以上設置されている。確かにこれならバックパックを持たなくても十分だ。これだけ自然の奥深いところまで、食料と機材を運ぶのが容易でないことは、想像に難くない。

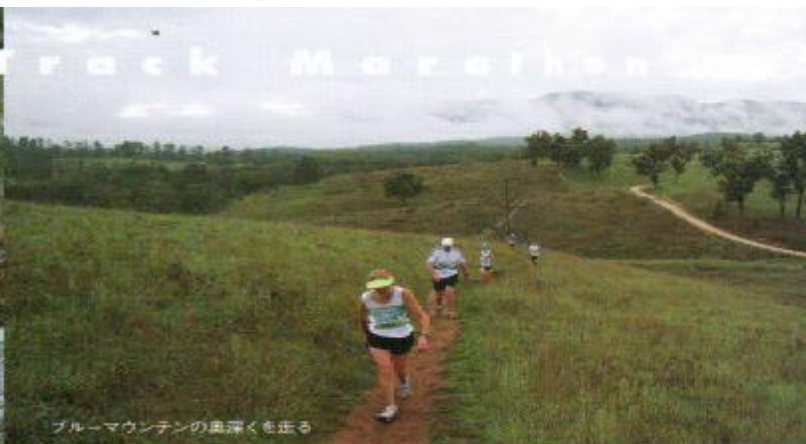
「ウエット、ドライ」

15・5km地点、レーススタッフがコースの分岐に立ち、2つの道を示しながら、それぞれの特徴をしゃべっている。どちらを選んでもコックス・リバーという川を渡ることになるのだが、ウエットコースを選ぶと、胸までつかるような川の深い場所を、ドライコースは倒木の橋ができているところを通る。僕はドライコースを選択。ウエットコースを選んだオージーの中には、豪快な水しぶきをあげながら泳いで渡るランナーもいた。

2つのコースはすぐにまた1本のトレイルになり、ここからは約10kmの間に、高低差700m以上を一気に上る。前半上り基調、後半下り基調になることが多い日本のトレイルレースと違い、スタートから15・5kmまで800m下り、本格的な上りはレース中盤から始まる。



下りの路面は日本よりイージーにまれる



ブルーマウンテンの奥深くを走る



ゴール地点にはランナーの友人や家族が待ってつめかけが

Six Foot Track Marathonデータ

- 申込者数 872人
 - 出走者数 849人
 - 完走者数(完走率) 809人(95%)
 - 優勝者 Sleep TRAIN 3:15:18
- ※2006年に石川弘樹さんが3時間43分42秒で7位
- 2010年大会に参加する場合は
- 開催日: 2010年3月13日
 申込方法: 下記HPよりウェブエントリー
<http://www.sixfoot.com/>
 申込開始日: 2009年12月1日
 ※定員になり次第締切
 定員: 850人
 参加費: 90~130オーストラリアドル
 ※参加にはフルマラソン4時間以内、ウルトラマラソン完走などの実績が必要

心揺さぶる オーストラリアのブルースカイ

オーストラリアのトレイルランナーたちは日本ほど路面の悪いトレイルを走らないのか、シューズはほとんどランニング用。少し勾配が急な下りになると、小さな日本人の敏捷性が勝り、面白いように前のランナーを抜くことができた。逆上りでは、一步の幅と力強さが物を言う。ゆっくり歩いてるように見えて、オージーたちの上りはなかなか速い。

汗が頬を伝って流れ落ちる。スタート時に空を覆っていた雲はどこか速くに流れ、強い日差しが身体に照りつける。落ちていた視線を、上り坂の先、斜め上に向けて、日本よりも濃いブルースカイ。後ろを振り返ると、ゆるやかな稜線がいくつも連なり、ブルーマウンテンの奥地まで続いているのが見える。

NYCマラソンでは、ファーストアベニューを埋め尽くす大観衆の声援に、マラソンというスポーツの持つパワーを感じた。ホノルルマラソンでは、10時間以上かけて懸命にゴールに向かうランナーと、それを温かく見守る人々を見て、目頭が熱くなった。

ブルーマウンテンの景色も、それらと同じくらい心揺さぶるものがあるが、ロードを走るフルマラソンは、先人たちが築き上げてきた文化や文明を感じさせられるのに対し、ここでは、人間の手がほとんど加わっていない、その土地のあ

りのままの姿に触れることができる。その時の心境は、エキサイティングというよりも、エモーショナルに近い。何か心臓破りの坂を越えたものの、脚は既に「終わった」状態。どうやら序盤の下りで調子に乗って、脚を使い過ぎたようだ。ロードのラップタイムメイクとは違い、本当の意味でのペースメイクを行わないと、トレイルは上手く走れない。山の深い部分を貫く林道をノロノロと、ひたすら我慢のランニング。歩いては走ってを繰り返す。

ようやくラスト2km。トレイルは谷間に落ちていくように、急斜度の下りに入る。視界が両脇に迫る岩壁で狭くなっていく。歓声が聞こえ、ゴールが近いことを悟る。しかしなかなかそれらしきものが見えてこない。本当にこんなところにゴールする場所なんかあるのだろうか。そう思った時、眼下に小さく茶色の屋根が見えた。トレイルはそこに向かって伸びているようだ。近づくに従い、大勢の人だかりも確認できるようになる。

「フロムジャパン、コンニチハ！」というMCの声が聞こえる。最後の階段を下りきり、左手に曲がると、谷間に建てられたレストハウスと、小さなブルーゲートが迎えてくれた。6時間14分15秒。「ゴールした時は、世界の王様になったような気分さ」

ゼッドさんの言葉を思い出しながら、ひとりでゲートをくぐる。歓声が自分だけに向けられているようで、少し照れくさかった。

アボリジニ伝説の舞台となった ブルーマウンテンの トレイルを走る

奇岩「スリーシスターズ」のバックには、ブルーマウンテンの広大な自然が広がる

「シックスフットトラックマラソン」翌日、疲れた身体をひきずり、再びブルーマウンテンを走った。アボリジニたちの伝説となった「3姉妹」を目標して――

伝説の奇岩を見ながら トレイルを走る

レース翌日も、トレイルシューズをはいているとは思わなかった。脚は筋疲労でパンパン。おぼつかない足取りで向かった先は、国立ブルーマウンテン公園。レースを走った後も、心残りがひとつあった。せっかくブルーマウンテンに来ただから、世界的に有名な奇岩「スリーシスターズ」をぜひ見てみたかった。レース前は、もしかしたら途中で見る事ができるかもしれない、と思ったものの、残念ながらコースからは離れていた。

公園内にはトレッキングコースがあり、スリーシスターズを一望できるエコー・ポイントと呼ばれる展望広場も、その道すがらにある。宿泊先のホテルから、トレイルの入口までは2km弱。これは走りに行くしかない。

シックスフットトラックよりも細く、緑に覆われたトレイルを走っていると、徐々に脚も調子を取り戻してきた。やや観光客が多いが、なかなか気持ちの良い場所だ。走っている人もいるかも、と思っただが、それらしき人影は見えない。20分ほど走ると、世界中の観光客が集うエコー・ポイントに辿り着いた。目にブルー

マウンテンの広大な自然と、奇妙に突き出た3つの大岩が飛び込んできた。

スリーシスターズの名前の由来は、アボリジニの伝説にある。その昔、この地方を支配していた魔王が、美しい3人の姉妹を我が物にしようとした。3人を守ろうとした魔術師は、彼女たちを岩に変えて、魔王の目をくらまそうとする。だがそれに怒った魔王が、魔術師を殺してしまったため、3人は人間に戻れなくなってしまう。

この風景を見て、そんな物語を作り出したアボリジニたちの想像力と、豊かな感性に改めて驚きを覚えた。と同時に、彼らと同じ風景を見て、その時の彼らの想いをなぞる自分が不思議であり、面白くもあった。

トレイルランの魅力は、確かに人工物でない自然の中を走ることにある。しかしその中であっても、根底には人間の想いが流れており、それ無くしては、多くの人がここまでの魅力を感じることはなかったのではないだろうか。前日のレースがそうだった。先人たちの積み上げてきた歴史、車の中で語り合ったオージー、ポランティアスタッフや、ともに走ったランナー。その想いを感じながら走る楽しさ、喜びというのは、ロードのフルマラソンと違うものではない。

エコー・ポイントを離れ、再びトレイルを走りだすと、後から荒い息遣いと足音。追ってきた。いた、トレイルランナー。さきも、我々と同じ想いは確かに